※写真は未完状態

1.大竹 亮峯　　《月光》　完成版

素材：楓、榧、神代欅、鹿角、チタン合金

Size：H63cm

夏目漱石は I love you を「月が綺麗ですね」と訳したそうだ。

日本人は、向かい合って愛を伝えるのではなく、

美しい対象物を共に眺め、心を通わすことで愛を表現する。

開花までのその時間。その奇跡を共に体験することで、その場に絆が生まれる。

この彫刻は月のように、人の心を通わせる。

昨年六本木ヒルズで行った KOGEI Next 展で発表した、月光。水を注げば花が咲く、驚愕の彫刻である。昨年 11 月から更に葉を加え、細部にわたり彫り込んだ完成版。花の開くスピードも調節可能。大竹亮峯が一年を費やし完成させた渾身の作品である。

※「驚異の超絶技巧、未来へ(仮称)」展出品予定　2023 年 2 月～(全国 5 美術館巡回)

製作中

2.前原 冬樹　　《一刻》トタンに釘

素材：イチイ

Size：H72cm×W40cm×D2.8cm

寂しげな風景の中に、どこか人がいた気配を感じる作品。

非常に硬いイチイの一枚板からトタンと釘を残しながら、彫り下げられている。

本作を「いずれ、この作が自分の代表作品となるだろう」と前原は述べる。前原自身が、好きなものを彫れた満足感がある様だ。本作は 20 年前に彫りかけていたものを、再開させて仕上げた。20 年前は心が折れたと言う。「こんな侘しい作品を誰も求めていない。」そう思うと、手が止まった。しかし今、この作品を再開すべき時がきたと感じたそうだ。前原は自身には常に完璧であることを課す反面、他者には寛容で、儚げな不完全を愛する。この作品は、そんな前原自身を見ている様である。

しかしそのストイックさ故、引き際も早い。前原の持つイメージを卓越したクオリティで表現するには、相応のフィジカルと気力が必要なのである。60 歳となる年を迎え、作品数を絞った制作に切り替えた。前原冬樹の最終章が始まってしまった。

※「驚異の超絶技巧、未来へ(仮称)」展出品予定　2023 年 2 月～(全国 5 美術館巡回)

※上記の展覧会にお貸し出し頂ける方への販売とさせて頂きます。

3.松本 涼　　《連鶴-四想祈安》

素材：楠

Size：23cm×23cm×H7cm

本作は継ぎ目はなく、一木から全て彫り出されている。それに加え、年輪に沿って彫刻を加え、樹木の生きた年月を浮き立たせている。

祈安とは安らかにある事を祈ると言う松本の造語。松本はモチーフである折鶴を「生と死の境界」と捉え、命の儚さを尊みながら、彫刻を施す。四羽の鶴たちがそれぞれの想いを持って、風車のように回転し、輪廻転生していく様に祈りを込める。

※「驚異の超絶技巧、未来へ(仮称)」展出品予定　2023 年 2 月～(全国 5 美術館巡回)

4.織田隼生　　《Hybrid》

素材：ステンレススチール

Size : W42×D42×H57cm

超絶技巧作家の特徴とは、その類まれな観察眼にある。他の人よりも物事に対して深く観察し、探求する。それによって、私たちが気付かぬところまで、描写出来るのだ。織田もその一人である。しかし、彼は他の作家と少し様子が違う。織田は視覚に頼らない。彼は、目には見えぬ、更に奥の世界を表現しようとしている。

私たちが見ている植物の奥にある、形の成り立ちを探求し、その現象をアルゴリズム化し、数学的に彫刻を形成していくのだ。

そして導き出される形に沿って、織田は日々ステンレスを叩き続ける。

言わば、植物たちの目に見えぬ世界を表現した「超・具象作品」とも言える作品形成なのである。

本作は、織田にとって過去最大の力作となった。パーツ数も最も多く、4ヶ月間昼夜問わず、この一作だけに向き合った意欲作である。今回は作品の成り立たせている数式(アルゴリズム)も公開する。

5.満田 晴穂　　《自在黒艶大角鍬形-Legius-》

素材：銅　真鍮　青銅

Size：L90×W70×H30mm

高瀬好山　　《鍬形虫》

素材: 青銅 銀

Size: L80×W50×H30mm

高瀬好山(1869-1934)と満田晴穂(1980-)

約 100 年の自在置物の歴史。

昭和の戦争により、その技術継承は一度途絶えた。しかし満田の出現によって、その芸術は復興された。

今回は満田の師匠筋となる高瀬好山との共演である。好山はミヤマクワガタ、満田は外国のレギウスオオツヤクワガタ。この 100 年間の環境変化、金工素材の変化、技巧の変化を比べて感じて頂けるはずだ。

6.壽堂　　《自在黄泉蛙》

素材：銀（KOGEI Next 都市鉱山由来)、18 金、赤銅、真鍮、

青銅、ネオジム磁石

Size： L36 × W35 × H20 (mm)

無事に還る。お金が返る。日本人は、蛙に様々な願いを込める。

この蛙は都市鉱山から再生した銀で製作した。

スクラップ工場から蘇った「黄泉蛙」。

自由自在に飛び跳ねる。

眼は 18 金と赤銅。腹部に強力なネオジム磁石が入っており、鉄製品に吸着させることが可能。現代へのアップデートを行いながらも、自在置物の歴史研究者という側面を持つ壽堂らしい、随所に玄人好みの演出を行った一作に仕上げられている。

7.鈴木 祥太　　《ツワブキ》

素材：都市鉱山金(KOGEI Next 都市鉱山由来)

Size：W27cm×D24cm×H26.5cm

「この花々は都市鉱山由来の金や銀で制作された。

言わば、都市に潜む養分を吸い上げ、開花した花なのである。」

ツワブキの花言葉は「困難に負けない」。

凛とした姿を見ると、不穏な世の情勢でもぶれず揺るがずにいようという気持ちにさせてくれます。都市鉱山由来の金を使用し、この花を制作してみたいと思いました。

１８金イエローゴールドに加工し、花びらにしています。硬い素材ですが、鏨による打ち出し表現によって柔らかな表情を作り出しています。<鈴木>

8.鈴木 祥太　　《梅》

素材：銀(KOGEI Next 都市鉱山由来)

Size：W27cm×D10cm×H7cm

「この花々は都市鉱山由来の金や銀で制作された。

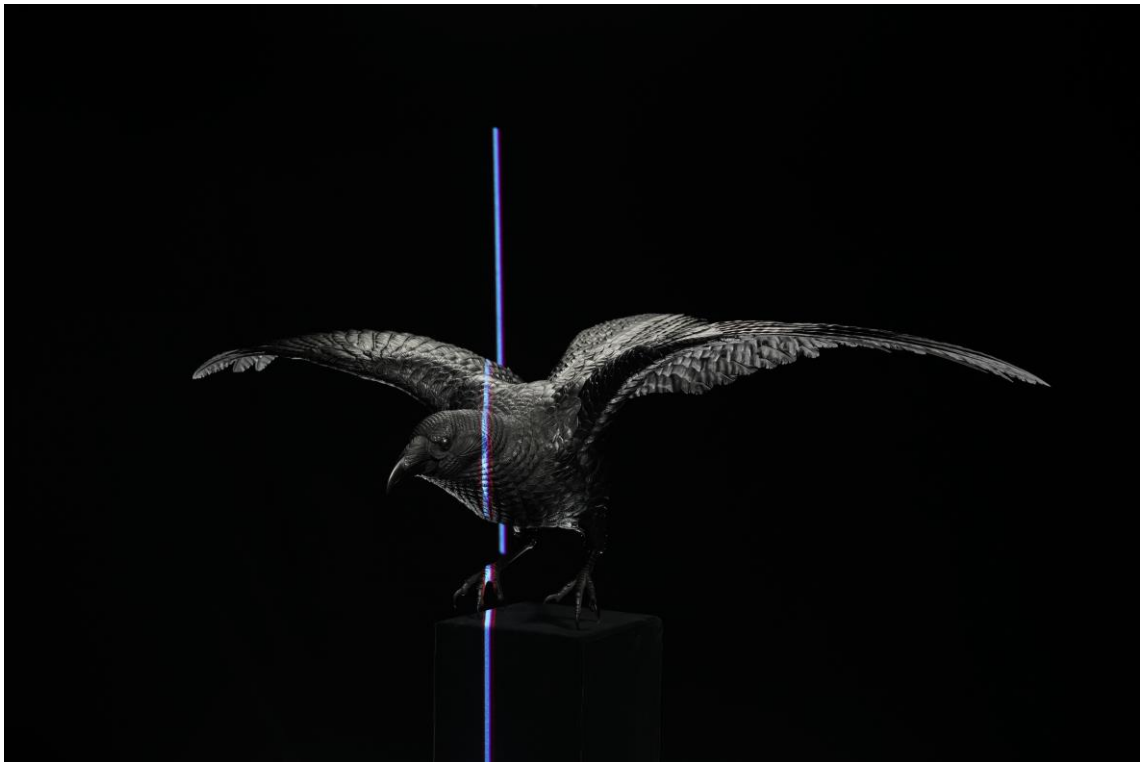
言わば、都市に潜む養分を吸い上げ、開花した花なのである。」

北野天満宮で見た八重野梅がとても美しく形にしました。

銀、銅の数百を超えるパーツを一枝の中に接合する困難な作業を経て完成された作品

です。また、枝の色合いは硫化、煮色、緑青着色などの複数の着色技法を組み合わせて表現しました。

今にも梅の香りが漂ってきそうな春の訪れを告げる作品です。<鈴木>



9.本郷 真也　　《Visible01》

素材：鉄、銀

size：W96×D91×H170 ㎝

この Visible01 の出現は、彫刻史の新たな 1 ページと言える。

彫刻は、目には見えない内部まで制作し表現する時代に突入するのである。

そして 500 年、1000 年後の遠い未来。

表皮の鉄が朽ちゆく時、内部の骨格や内包物が、肉眼でも確認出来るようになる。

このシリーズでは、彫刻を三次元から解き放ち、文字通り異次元の制作を試みていく。

昨年六本木ヒルズで行った KOGEI Next 展で発表した visible01。

本作は更なるデジタル次元との融合を試み、皆様のお持ちのディバイスで彫刻内部を鑑賞出来る様に開発を進めております。アートフェア東京の時点では、ブース内に置かれる i Pad でご覧頂ける様になる予定です。(2022 年内完全完成予定)

※「驚異の超絶技巧、未来へ(仮称)」展出品予定　2023 年 2 月～(全国 5 美術館巡回)

※上記の展覧会の他にも展示を予定しております。販売はご相談とさせて頂きます。

10.本郷 真也　　《盈虚 -鐵自在イグアナ-》

素材：鉄

Size：W140cm×D68cm×H25cm

この大作を本郷は一人で、僅か 1 年程の制作期間で制作した。自在置物を制作したのは、この作品が初めてだと言うから驚く。鉄という最も加工が難しい素材において、他者と比較にならない程、本郷の仕事は早い。その理由は、本郷独特の制作工程から垣間見られる。本郷は図面を描かない。表現したいものを二次元に変換せず、頭の中にあるイメージで直接手を動かせるのだ。それは彫刻家一家で育った才能であろう。今作では、打ち出し、溶接、象嵌、自在など本郷が体得したあらゆる鉄工の技巧を見

る事が出来る。数え切れない部品を加工し、工程を経て、この大作は完成した。そのハードワークは、才能だけでは語れない。もはや鉄鍛金の工芸技術において、歴史的にも類を見ない存在になった本郷真也。彼はどこまで登りつめるのだろうか。

今作はパートナーの令和工藝、Dentsu Craft Tokyo と協力し、このイグアナの為の特別な展示台を作成した。まるでこのイグアナが本当に生きている様に感じて頂けるであろう。

※「リアルのゆくえ」展出品予定　2022 年 4 月～(全国 5 美術館巡回)

11.彦十蒔絵　　《見立漆器 黒楽茶椀 大黒 長次郎》

素材： 欅、漆、砥粉、炭粉

size： H80 ㎜　口径 118 ㎜

大黒は桃山時代の初代長次郎作で、千利休にも愛された最も有名な楽茶碗である。そのお碗を漆芸の技法で見立て、貫入塗りの技術や錆漆など様々な漆芸技法を駆使し、400 年以上も愛され使い込まれた風合いに仕上げた。手に取ると、その軽さに驚く。工芸とは視覚芸術ではなく、体感することで感動を得るのだ。

<技法>青銅塗、錆漆、ヒビ塗りを合わせた塗り。

大黒表面はトン錆によって凹凸を造り駿河炭（するがずみ）を蒔き黒漆と生漆を塗り込む。厚めに塗った錆漆をトントンと叩きながら垂らしていく技法。錆の作り方に特徴があり、彦十蒔絵の秘伝の技である。

青銅塗り(石目塗り)と呼ばれる駿河炭の粉末を蒔く技法は、明治期に活躍した柴田是真の代表的な技術である。この技法を更に発展させ、今作では青銅塗りと錆漆を掛け合わせた。これは彦十蒔絵独自進化である。また、内部の茶色は、漆に湿気を強烈に与えると焼けて茶色くなる特性を利用した。これは漆において、一般的に「漆が焼け

る」という劣化の一例である。しかし、彦十蒔絵は逆転の発想で、この科学的現象を用い、作品の演出・色彩表現として転用したのである。

12.彦十蒔絵　　《見立漆器 白楽茶椀 不二山 本阿弥光悦》

素材： 欅、漆、砥粉、炭粉、都市鉱山金箔

size： H90 ㎜　口径 118 ㎜

国宝に指定されている本阿弥光悦の”不二山”を漆芸技術を駆使し、制作した。

銘は光悦がつけたと言われ、由来は茶碗の景色を富士山に見立てたと言う。または、これ以上ない出来栄えを不二（二つはない）と命名したと言われている。

彦十蒔絵の若宮はこの茶碗から「二度とない命」や「一期一会」を感じると言う。若宮はこのお椀を葛飾北斎の「富士山に稲妻図」を合わせ、金継ぎのように見立てた。金継ぎはパラリンピックでも話題になったように「誰もが持つ不完全さを受け入れ、隠すのではなく大事にしよう」という哲学がある。一人では不完全でも、個性を活かし、補い合って社会を作る。スペシャリストが集まり、リレー形式で最高の逸品つくりを目指す、彦十蒔絵らしい思想である。是非、手に取って頂き、この作品が陶芸ではない事を確かめて頂きたい。

<技法>錆漆、ヒビ塗り、ヒビ塗り見立て

通常、ヒビ塗りは大抵黒漆か朱漆で行う。しかし今回は白漆のヒビ塗りに挑んだ。

ヒビ塗りとは半渇きの時に、卵白を塗ることで、乾くスピードの差で表面にヒビを作る技法である。しかしタイミング等、様々な条件下で、思い通りにはならない。

特に白漆は卵白を塗ると黒く変色するため成功率は恐ろしく低い。

13.彦十蒔絵　　《見立漆器 唐物肩衝茶入 暁山肩衝 東山御物 大名物 南宋時代》

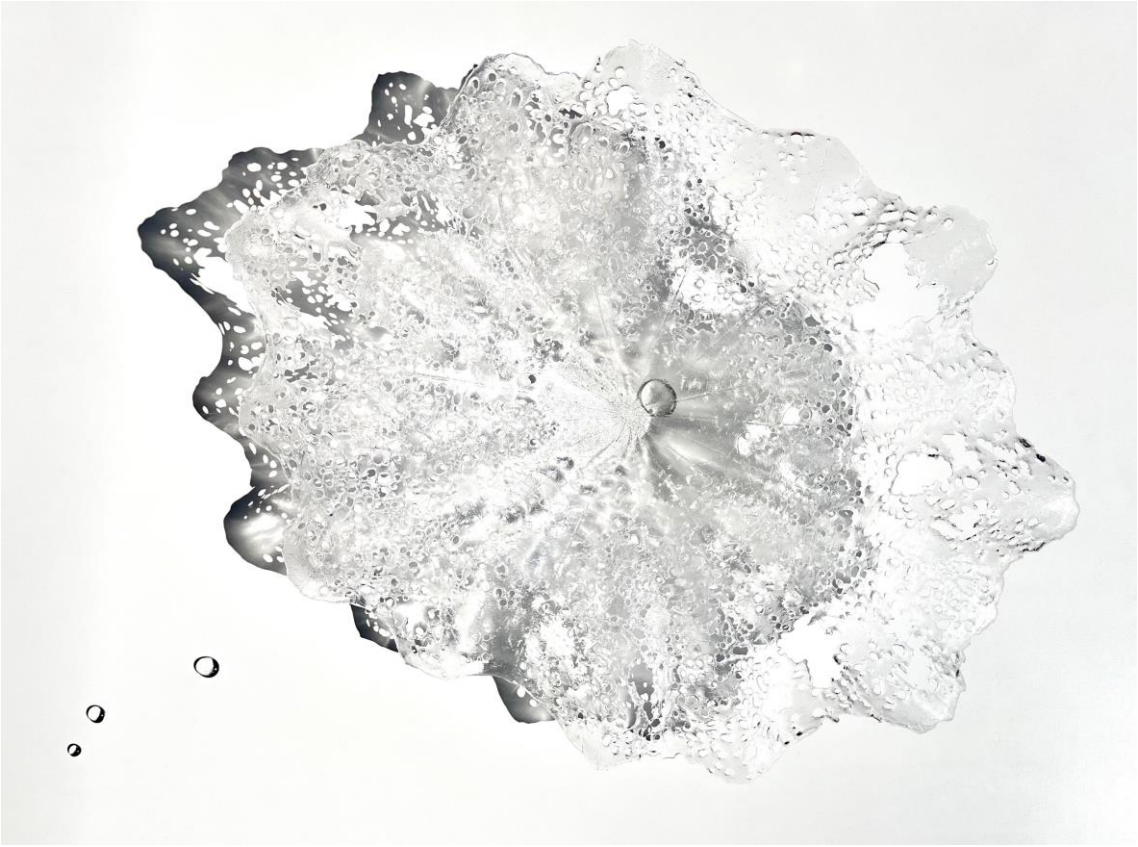
素材： 欅、漆、炭粉、膠、都市鉱山金箔

size： H84 ㎜　　口径 80 ㎜

この茶入は室町幕府から直接奈良興福寺成身院に渡ったため、名物帳にも登場しなかった大名物である。漆芸技法を駆使して南宋時代の焼き物の風合いに挑んだ。

<技法>特徴は茶入れの形を欅材を用いて轆轤で削り出した点である。象牙に見立てた蓋、これも欅材で制作し、漆を塗り、胡粉と膠を塗りながら象牙に見えるように仕立てた。この形に至るまで何度もサンプルを挽いて、シルエットを追求した。

木地は今回の三作品共、長年の計画の元、特別な欅材で制作した。轆轤師が 10 年以上欅材を寝かし、雨ざらしにして白太（しらた）の部分を朽ちさせた。また、あえてカビを繁殖させるような養生方法を実施。それから燻煙乾燥を 2 週間ほど行い、自然乾燥で水分含有量調整してから轆轤挽きした。若宮は「この欅材は生涯においてもう二度とは手に入らないだろう。」と話す。



14.野田朗子　　《Re-born from broken Baccarat》-蓮葉-

素材：Broken Baccarat vase <after 1990>

size：　W63cm×D49cm×H13cm

割れてしまったバカラ社製の製品から、作品制作する実験を行った。バカラ社は 30%の酸化鉛を含むクリスタルガラス製品を製造するメーカーとして、世界的に有名である。このガラスの質であれば、繊細で技巧的な作品さえも再制作出来るのである。

前回の六本木ヒルズでの発表作品の実験を経て、今回は大きな作品に挑戦した。野田の代表作でもある蓮の葉である。バカラの特有の美しい透明さを活かし、新たな命を吹き込んだ。

割れたその先にも、美しい物語の可能性があることをこの作品から感じて頂きたい。

15.つのだゆき　　《ネッタイシマカ》

<With special glass bracelet and AR application >　※完全限定制作

素材：ガラス

size：　W2.8×D3.2cm×H1.5cm

<Without bracelet and AR >※完全限定制作

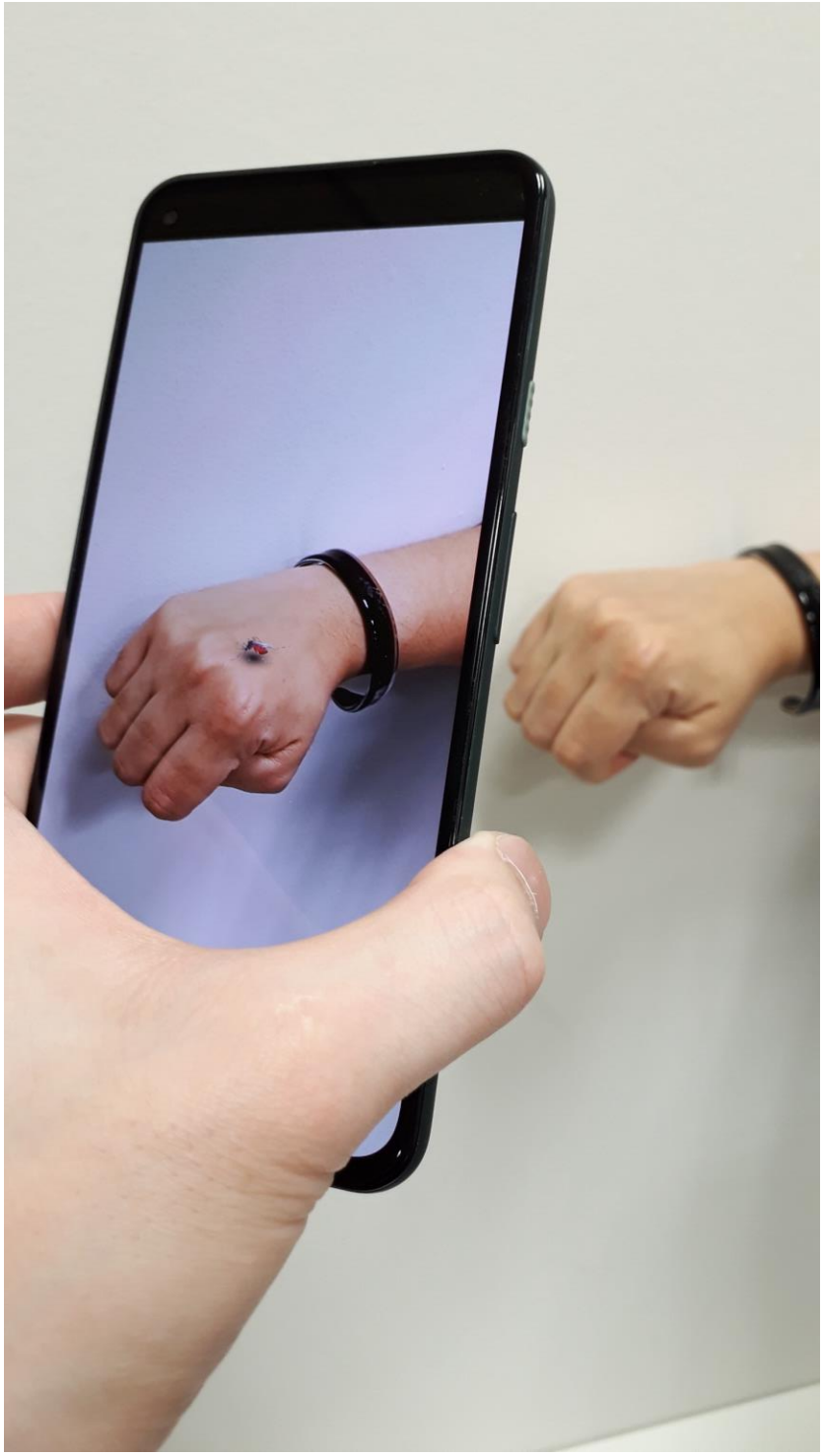
ネッタイシマカはテング熱やマラリアを媒介する蚊として知られている。その姿は一見、日本に生息するヒトスジシマカと区別がつかない。過去にはわが国でも確認され

たこともあったが、現在は生息していない。しかし、地球温暖化が進み、航空機や船に紛れ込んで日本に来た蚊が越冬できるようになれば、私たちの生活を脅かす存在となる。熱帯地域特有の感染症は、今そこにある新たな危機のひとつなのである。

本作では、つのだの精巧なガラス細工にデジタル AR 表現を組み込んだ。

皆さんがお持ちのディバイスに専用アプリをダウンロードして頂き、この蚊にかざす事によって、貴方の腕に蚊が飛んでくる。

それは一見コメディの様に感じるが、「貴方の血を吸った蚊はネッタイシマカかもしれない。」という強烈な地球温暖化に関する警鐘メッセージが内包されているのだ。



〈AR 上で蚊が腕に飛んでくる>

つのだが制作したガラスのブレスレッドを装着することで、ネッタイシマカが貴方の

腕に飛んで来ます。この蚊の赤色は貴方の血なのです。

New Artist

16.David Bielander 《Crown》

素材：銀 （Responsible Jewellery Council 認定）

size：W17.5cm×D17.5cm×H3.5cm

ベルリン在住、スイス人のアーティスト David Bielander

切った段ボールをホッチキスで留めただけのシンプルな王冠。と思ったら、

手にとった瞬間、金属特有のひんやり滑らかな質感に驚く。

断面の波型も忠実に再現され、工業的な構造は薄いシルバーによる美しいパターンとなり、重なる部分にはホワイトゴールドで出来たホッチキスが、さり気なくエレガントにアクセントを効かせている。

使用した材は、Responsible Jewellery Councilが認定した、ヨーロッパでリサイクルされた銀である。そして、それをダンボールに見立て、表現した。

ダンボールとは、私たちの生活に最も身近な再生率の高い梱包材である。

Davidはジュエリーやアート制作においても、再生材の使用や循環の可能性を問いかけている。

Public collection: Museum of Arts and Design NY (MAD)

17.David Bielander 《Crucifix》

素材：銀 （Responsible Jewellery Council 認定）

Size: W15.5cm×D5cm×H28cm

2015 年から制作をはじめた cardboard シリーズ。

その中でも、詫びた佇まいながら、特に存在感のある作品である。

この作品は欧州で回収され、リサイクルされた特別な銀から制作した。

Davidはこの銀の再生にキリストの復活を重ねる。

そして、それをダンボールに見立て、表現した。

この作品は我々に、この時代における更なる再生や循環の可能性を問いかけている。

Public collection: The collection of Artothek（ドイツ）、Art Gallery of Western Australia

18-1. David Bielander 《Digital Watch》-Gold-

素材：18 金 -KOGEI Next 都市鉱山由来-

※生涯限定 5 作品以内

With AR application(デジタルアプリケーション作品)

<コンセプト>

この時計は小型家電などの CPU から再資源化された金から制作する。

この特別な金は、私たちの目には見えないところで、社会やデジタル世界を支えている。金は私たちの世界では金貨やジュエリーになるが、デジタル世界では、その存在感を消し、性質能力のみを発揮している。

そして、現代社会に内在していたこの金は、この作品によって初めて人の目の前に顕在化される。

この David の時計を見てみよう。この時計には、80g の金が使われている。これは、携帯電話で言えば、3000 台ほどをリサイクルし、抽出された。

この時計の針は動かない。

しかし、今もこの金たちはデジタル世界を動かす大きな力を持っているのだ。

<18-2.事項に制作背景続く>

18-2. David Bielander 《Digital Watch》-Silver- ※オーダーワーク

素材：銀(燻銀仕上げ) -KOGEI Next 都市鉱山由来-

With AR application or Without AR application

《16-1》と同じく小型家電などの CPU から再資源化された銀から制作する。銀の都市鉱山採掘プロジェクトは今回発表する作品が初めてである。

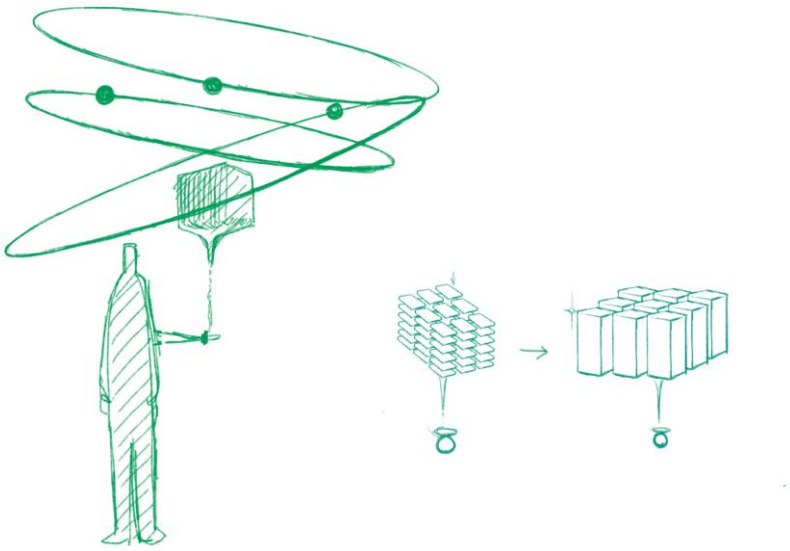
<制作背景>

かつて日本から派生したクオーツショックにより、スイスの時計業界は大きな打撃を受けた。しかし、今ではスイスの時計業界はラグジュアリー戦略によって再生し、腕時計を「時を知

る道具」から「持つ喜び」に転換させた。職人が一つ一つ手作りし、工芸品の様な完璧な美しい時計たちは世界中のセレブたちを魅了している。この見事な戦略により、スイス時計の海外市場規模はこの 30 年あまりで約 4 倍にまで成長した。この半世紀にわたる、時計の国スイスと精密機器の国日本の争いは、今もなお続いている。

この作品は、その様な時計産業において、ライバル関係の歴史を持つ両国の間の共同作品である。日本のデジタル世界を動かしていた金や銀を再資源化し、スイス人の彫刻家がハンドメイドで制作する。そして、その金の性質になぞらえ日本人チームがデジタル上で命を演出する。アナログやデジタル、工業や工芸、国といった概念を超えて、現代アートとして新たな時代の価値の提示を試みた作品である。

《Swiss- Japanese Watch 》AR イメージ



時刻を抽象化した円環が空中に 3 つ現れる。

12 時間で一周、1 時間で一周、1 分で一周するそれぞれの球体。

中心部には都市鉱山を抽象化した物体が浮かぶ。

そこから金が降り注ぎ、この時計を形成している。

この金は現代社会に内在し、社会やデジタル世界を支えていた。

そして今、初めて人の目の前に時計(彫刻物)として顕在化された。

AR として触れることの出来ない軌道に乗った金属の惑星は、デジタル世界という拡張

された新たな宇宙を示唆する。

この時計の針は動かない。

しかし、今でもこの金たちは、もう一つの宇宙を動かす大きな力を持っている。

Technical partner: 計数技研/KEISUUGIKEN

Dentsu Craft Tokyo

Cai inc.

Art director: 中村直人/ Naoto Nakamura

Concept: 鐘ヶ江英夫/ Hideo Kanegae